

# 子どもの心と道德教育

## 善悪判断は年齢によって異なる

—先生は道德教育をご専門に研究していらっしゃいます。具体的にはどんな内容ですか？

現在の道德教育の流れは大きく2つに分けることができます。ひとつは、子どもに社会規範を受容させ、行動を習慣化させること重視し、「社会が持つ伝統的な価値や規範をきちんと教えていくべきだ」とする立場です。もうひとつは、そうした価値の教え込みに反対し、「子どもは仲間や社会とかかわり、さまざまな葛藤を経験する中で、自分なりの正しさの枠組みを主体的に構成していく」とする立場です。わたしは後者の立場から、幼児期から児童期にかけての道德性の発達について研究しています。

—幼児の道德性に特徴的な変化があるのですか。

同じ幼児期といっても、3歳ぐらいの年少さんと5歳ぐらいの年長さんでは、善悪の考え方に違いが出てきます。たとえば、子ども同士がけんかをして、叩かれ、叩き返したときに、大人が間に入って「お互いにごめんねしたら」と言ったらどうなるでしょう。年少さんなら、素直に従って「ごめんね」「いいよ」などとお互いに謝るかもしれませんが、3歳ぐらいの子どもでは、自分の中に「何が正しいこと(公正)か」の基準が十分に確立されていないため、「先生が悪いと言っているから悪い」のように大人の権威に従うことが多いですね。

ですが、年長さんの場合、同じように対処したら、先に手を出された方は「私はやり返しただけで、悪くない」と不満を抱くかもしれません。たとえば、こうした考え方のことを報復的公正と言いますが、正しさに関するさまざまな基準が自分の中に確立されてくのが4~5歳にかけての時期なのです。

—道德教育やしつけの問題では、体罰の是非が議論になります。

保育所・幼稚園・小学校の先生方の研修会で、親としてあるいは一般論として「どんなことがあっても幼児に手をあげるべきではない」という意見に賛成か反対か、よく尋ねてみるんです。すると、だいたい賛否が拮抗して、先生同士の議論も平行線をたどりまです。でも、多くの場合、体罰反対派の先生が若干容認の方向に流れるんですね。「命や危険、他者の痛みをわからせるためには必要だ」という意見に説得力があるみたいです。

でも、それに対して、私は「ちょっと立ち止まって考えてみませんか」と言いたいんです。「愛のムチによって、人の痛みがわかるようになった」という方もいますが、「体罰を受けずに育ったけど、ちゃんと人の痛みがわかる」という方もたくさんいるのです。道德性とは「自分と他者とを大切にできる心」ですが、これを育むために本当に体罰が必要なのか、よく考える必要があると思います。



宮城教育大学 教育学部  
学校教育講座 講師

## 越中 康治 先生

博士(心理学)。山形市出身。宮城教育大学教育学部卒業。広島大学大学院教育学研究科修了。広島大学助手、山口大学講師を経て、2010年より現職。専門は社会性・道德性の発達。2児の父。



多くのママたちが悩んでいる子どものしつけ。子どもたちの心はどのように成長し、社会性や道德性を身につけていくのでしょうか。道德教育が専門の宮城教育大学教育学部の越中康治先生にお話を伺いました。

## 他者との葛藤を通して学んでいく

—子どもに教えなければいけないことは、どんなことでしょうか。

道德教育で大切なことは、大人が子どもに善悪を教え込むことではないと思います。たとえば、ヌッチという研究者は、他者の痛みや公正などの道德的概念(後述の道德領域)の発達にとって大切なことは、仲間とかかわりの中で生じるけんかや葛藤であると指摘しています。被害者、加害者、目撃者としての経験を通して、子どもは善悪を判断する上でさまざまな視点があることに気づくとともに、他者と折り合いを付けながら現実の問題にいかに対処すべきかを学びます。重要なのは、大人がそうした学びをいかに支えるかです。

また、チュリエルという研究者は、私たちが善悪を考える際の認知の枠組みには3つの領域があると指摘しています。「人を傷つける」などの善悪が普遍的な問題と関連する「道德領域」、「手つかみで食事をする」などの善悪が権威や規則に左右される問題と関連する「慣習領域」、「誰を友達とするか」などの善悪が個人の自由委ねられる問題と関連する「個人領域」の3つの思考領域です。

たとえば、喫煙の是非を考えるとき、大人は、副流煙による他者への危害(道德領域)や喫煙が法律で認められているか否か(慣習領域)、煙草を吸う自由と自身の健康の問題(個人領域)などのさまざまな思考を調整して、判断をくだします。体罰の是非について大人の意見が分かれるのも、同じような認知が働くためです。他者とのかかわりを通して、こうした多元的な思考が芽生えるのが幼児期なのです。

—家庭内のルールについて、子どもがほかの家庭と比べて不満を持つことがあります。どのように対応すべきでしょうか。

「あの家ではいいのに、どうしてうちではダメなの」と疑問を抱き、その思いを親にぶつけ、議論・交渉を重ねる経験は幼児にとって大切です。特に、服装やマナー(慣習領域)、趣味の選択やプライバシー(個人領域)などの問題は、思春期・青年期以降も親子の葛藤の中心となります。親の価値観を一方向的に押し付けるのではなく、幼児期から親子で話し合い、子どもとともに家庭のルールをつくっていくという姿勢が大切だと思います。

—心理学的な発達という点から、現在の学校教育について何かご意見はありますか。

意見と言うほどのことではないですが、お父さん・お母さん方と、保育所・幼稚園・小学校の先生方とが、子育てや教育について直接話し合っ、いろいろな意見にふれる機会がもっとあればよいなと思っています。

小学1年生が授業中に座ってられないなどの「小1プロブレム」が問題となったりする中で、宮城県内でも、幼保小の先生方が相互理解・連携を図るべくさまざまな取り組みをされています。こうした機会に所属の違う先生同士で対話をされると、お互いの違いにびっくりされることも多いんです。たとえば、子どものけんかへの対応ひとつをとっても、小学校の先生方が説いて諭そうとするのに対して、幼保の先生方はまず話を聞いて子どもの気持ちに寄り添おうとしたり…。教育のブロの先生方でもいろいろな考え方があるのが道德教育の面白さだと思います。